行動計量学会報

日本行動計量学会事務局
東京都港区南麻布４－６－７
統計数理研究所　村上研究室

第２６回大会を終えて

池田　央

第２６回大会は東京池袋の立教大学で行われました。台風の影響で，予定通りの開催が可能かどうかひやりとさせられた場面もありましたが，若干のケースを除いて，大きな支障もなく無事終えることが出来ました。

前回立教大学で大会が行われたのは，奇しくも今からちょうど２０年前の第６回大会でした。当時も実行委員長を務めさしていただいた関係上，わたくしにはこの２０年間に見られた社会や学会の研究発表の変化にはひとしお興味深いものがあります。当時はまだ学会の規模も小さく，大会の企画運営に参加できる本学のメンバー数も僅かでした。また，当時の発表論文集を見ると掲載論文数が５８件で，すべて手書きのままの印刷でした。

この２０年の間に，それも最近のことではありますが，本学の学会員スタッフ数も増え，若い有能な人々の協力を得て，企画から運営に至るまで大会を盛り上げることが出来ました。新しい情報機器を備えた教室会場も用意することが出来ました。

今回の大会参加者数は記録では３２７名，特別記念講演に日本学士院会員で本学会の名誉会員でもある京極純一氏，ならびにノースカロライナ大学 K.A.Bollen 教授 ，ライデン大学 J.J.Meulman 教授の２人の外国人招待講演者を迎えることも出来ました。シンポジウム，特別セッション，一般セッションを含めた発表件数は１４３件にのぼり，２０年前とは格段の増加となっております。掲載論文の形もすべてワープロ原稿に変わりました。

発表領域も尺度構成や多変量解析，社会調査法等，伝統的に本学会が得意分野としてきたものの他に，共分散構造分析，ベイズ統計，ファジイ理論，合理的選択行動，震災時の行動分析，ニューラルネットワーク，社会ネットワーク，マーケティング，入試データ解析，政治現象の計量分析，言語文学の計量分析，日本語の国際比較，医療臨床試験など，多領域に拡がり，理論だけでなく実際への応用研究が目立ったように思います。なかでもインターネットを利用した調査や統計分析の会場には多くの会員が集まり，時代の関心の高さを思わせるものでした。

ただ難しかったのは，そうした会員の関心の違いを考慮しつつプログラムの配置割りを決めることで，一部の会場に出席者が固まってしまうという不公平さが生ずるのは止むを得ないことでした。同じことは，大会とは一応切り離した形で前日に開催された公開シンポジウムについてもいえ，休日の上に事前情報の周知徹底が足りなかったためか，いまひとつの集まりであったことが悔やまれます。

一部で利用した情報機器による発表提示形式は，発表の効果を高めるものとして，威力を発揮したように思います。開設されたホームページには２９００件を越えるアクセスがありました。今後こうした形の学会発表が一層盛んになるに違いありません。それにしても裏方で設営に苦労して下さった担当助手を始め関係者の努力は大変なもので，改めて感謝の意を表します。また今回大会に参加し，その進行に協力を惜しまれなかった多くの会員諸氏にも，実行委員会を代表して厚く御礼申し上げます。

（いけだ　ひろし：日本行動計量学会第２６回大会実行委員長・理事，立教大学名誉教授）

功績賞を受賞して

肥田野 直

今回、思いがけず功績賞をいただき、まことに光栄なことと存じております。既に現役を引退して、名誉会員にしていただいておりますので、受賞の資格はないと思っておりましたから、ただただ恐縮するばかりです。

行動計量学会は林知己夫先生によって創設され、それ以来先生を理事長にいただいて発展を遂げてきました。私は2代目の理事長を1期務めさせていただいたに過ぎず、学会に対する貢献は無に等しいのですが、この学会に対する期待は人後に落ちないと思っております。伝統的な縦割りの学問分類に当てはまらない学際的学会の運営は容易ではありませんが、会員各位のご努力によってますます充実していくことを念願しております。

林先生との最初の出会いは戦後間もなく行われた「読み書き能力調査」であったと思います。わが国の占領政策の一環として国字改革が論議され、その第一歩として、識字率の調査が行われたのでした。1948年（昭和23年）8月に行われたこの調査は言語学、国語学、心理学の専門家の他にローマ字論者が問題作成に当たりました。野元菊雄名誉会員は国語学の代表として参加されました。また、林先生は調査の設計・分析部門の代表者でした。15歳から64歳までの全国人口から層化無作為抽出によって選ばれた約2万人の対象者中、出席率は80％を越え、この種の全国調査としては驚異的な数字となりました。

調査結果もこれに劣らず驚異的で、かな及び漢字が全く読み書きできない者はわずか2．1％に過ぎないことが明らかになり、日本人の高い識字率が改めて認識されたのでした。私もこの調査の末端に連なっており、大規模なサンプリング調査の手法に新鮮な驚きを感じずにはいられませんでした。

テスト理論も昭和20年代に導入されました。私が当時学んだ古典的テスト理論はもはや時代遅れの感がありますが、コンピュータがなかった時代に手回し計算機と数表を頼りにデータ処理に苦労した思い出が残っています。時代とともに処理の手段は格段に進歩しましたが、まず、なまのデータに触れて、そこから分析の方法を考えよ、という林先生の言葉は現在もなお私の指針となっております。

今回の受賞を機会に、この場を借りて、会員の皆様に心から御礼申しあげます。

優秀賞を受賞して

東京外国語大学 市川 雅教

この度の優秀賞の受賞は，ここ数年の間に発表してきた，因子分析（あるいはそれを一般化した共分散構造分析）におけるブートストラップ法の利用についての研究が評価されたものと理解しています．これは，自分が大好きな因子分析とシミュレーション，そしてプログラミングを合体させたテーマということもできます．因子分析との出会いは学生時代にまでさかのぼります．当初は理論的なことは全くわからないユーザで，SPSSを用いて手持ちのデータに因子分析を適用しては喜んでいました．この blind factor analyst の時期があったことが，因子分析への興味を持続させている原因なのではないかと思います．やがて，手法についての「十分な」知識がないままに利用するのは危険であること，そして，因子分析の理論について調べていけば，当時の研究テーマであった，栄養調査に基づく食生活研究の発展の方向も自ずと見えてくるのではないかと考え，因子分析そのものについてもいろいろ調べるうちに，すっかり深入りしてしまいました．

一方，ブートストラップとの出会いは，1983年の7月号のサイエンスに掲載された，ダイアコニスとエフロンによる「コンピュータがひらく新しい統計学」というタイトルの論文（翻訳）です．理論や数式に基づく解析を，コンピュータを用いた大量の反復計算に置き換えることに新鮮な驚きを覚えました．

いつかはこの2つを結び付けた論文を書きたいと思っていました．6，7年程前から取り組み始め，いくつかの論文を発表することができました．それらが，行動計量学会で評価された

ことを大変うれしく思います．簡単ですが，以上をもちまして，受賞の言葉とさせていただきます．

お知らせ

日本行動計量学会のホームページを以下のULR に開設いたしました。いろいろな情報を掲載いたしましたので、どうぞご活用下さい。

http://wwwsoc.nacsis.ac.jp/bsj/index.html

第27回日本行動計量学会大会

第２７回大会は岡山大学が当番となり、倉敷市で次の日程・場所で開催することにしました。倉敷市はJR倉敷駅の近くに「大原美術館」を中心とする「美観地区」があり、観光に来られた会員も多いことと思います。駅の北口には「倉敷チボリ公園」も開園し、コンベンションにも力をいれているところです。

この美観地区の端にある芸文館と市民会館を会場として大会を行います。２つの会場の間は徒歩で５分ほどですが、散策しながら、次のセッションのために頭を休めてもらえればと思っています。

ただいま、共通テーマの提案、オーガナイザーの自薦・他薦を受け付けております。詳細は３月頃に発送される第１報をお待ち下さい。

期日：平成11年9月20日(月)～22日(水)
場所：岡山県　倉敷市　美観地区周辺
　　第１会場　倉敷市芸文館
　　第２会場　倉敷市民会館
第１報発送：平成１１年３月頃
講演申込締切：平成１１年６月頃
早期参加申込締切：平成１１年６月頃
　　（割引あり）
予稿集原稿締切：平成１１年７月頃
ホームページ（学会のホームページからもリンクが張られています）
http://www.f7.ems.okayama-u.ac.jp/~bsj99/

運営委員会から

第２回春の合宿セミナー

春の合宿セミナーでは統計ユーザーの方々にわかりやすく分析方法を講義します．今春，千葉・検見川で行われたセミナーは大変好評でした．第２回春の合宿セミナーは来春大阪にて開催いたします．日程・場所は以下を予定しております．

日程： 平成１１年３月２９日（月）～３１日（水）
場所： 大阪大学人間科学部（吹田キャンパス）
参加費： 実費
運営委員長： 岡太彬訓（立教大学社会学部 okada@rikkyo.ac.jp）
企画責任者： 狩野　裕（大阪大学人間科学部 kano@hus.osaka-u.ac.jp）

詳しい内容は未定ですが，現在のところ，数量化理論，多次元尺度法，クラスター分析，回帰分析，ニューラルネットなどを考えています．さらに，もう一度基礎統計を復習してみたい，また，統計学の講義方法で悩んでいるという方の要望に応えて，「私ならこう教える基礎統計」なるセッションを計画しています．詳しい情報は，順次以下のULR へアップしていきます．

http://koko15.hus.osaka-u.ac.jp/~kano/seminar/index.html

お問い合わせは企画責任者（狩野　かの：kano@hus.osaka-u.ac.jp ）または運営委員長（岡太 おかだ：okada@rikkyo.ac.jp）まで．

なお，非会員の方も参加できます．次号の会報で詳しい情報をお知らせします．

小グループ研究会募集

日本行動計量学会では，研究活動の活性化をはかるため，毎年数件の小グループ研究会に対して資金的援助を行っています．平成11年度の小グループ研究会の募集を下記の要領で行います．

昨年度からの継続，本年度からの新規，どちらでも結構です．奮ってご応募下さい．なお審査結果は，5月中旬にお知らせする予定です．

提出書類：研究会名，代表者，参加予定人数，簡単な内容（50～100 字程度），活動予定を記載したもの（既定の様式はありませんがA4版用紙を使用して下さい）．

応募期限：平成11年1月16日（土）必着

郵送先：〒171-8501 東京都豊島区西池袋3丁目 立教大学社会学部
日本行動計量学会運営委員会委員長
岡太 彬訓

お問い合わせは，岡太(tel 03-3985-2319)までお願いします．

平成10年度第3回理事会議事録

日　　時:平成10年9月16日　PM6:30～8:30
場　　所：立教大学
出 席 者：池田 央,岩崎 学,江川 清,大隅 昇,岡太彬訓,久保武士,繁桝算男,杉山明子,垂水共之,林 文,前川眞一,村上征勝,柳井晴夫,柳原良造,山岡和枝,吉野諒三,吉村 功

議　題

1．行動計量学会総会について
総会次第を検討した。

2．第27回大会（平成11年度）について
垂水理事（第27回大会実行委員長）より以下の報告があった。
・ 会場は倉敷市芸文館と市民会館の二ヵ所（4室）とする。
・ 日程は平成10年9月20日(月)～22日(水)までとする。

3．各種委員会報告
・池田編集委員長より 16 日の午後開催された欧文誌・和文誌合同編集委員会での検討事項の報告があった。
・久保和文誌編集長より、以下の報告があった。
・25巻1号　9月下旬に発刊予定
・25巻2号　特集「生と死を考える」を予定
・繁桝欧文誌編集長より、以下の報告があった。
・Vol.26. No.2 原稿を入稿 10月上旬に発刊予定
・Vol.27. No.1　ニューラルネットワークの特集号を予定。サイコメトリカとの目次の交換を行うこととなった。
・岡太運営委員長より、以下の報告があった。
・1998年6月19日に運営委員会を開催した。次回は9月17日に開催の予定である。
・行動計量シンポジウム にかんしては以下のものを計画している。
・第66回行動計量学シンポジウム「社会科学におけるゲームの理論と応用と可能性」を 11月7日に開催する。
・言語の国際比較調査（仮題）
・東北大学を中心とする小グループ研究会を中心にしたものを予定
・データ・ベースの構築とその問題点（仮題）
・ 講習会に関しては、
・ チュートリアルセミナー 「行動計量学におけるインターネットの利用」を9月15日に実施した。

また次のものを計画中である。
・1999年3月に合宿セミナーを予定
・統計手法の実習を含めたもの
・山岡会報担当理事より学会のホームページを試作したとの報告があった。

4．その他
・柳井サイコメトリック国際会議検討委員会委員長より、会場、予算等について検討中の案の説明があり、これに関して議論した結果をサイコメトリック国際会議検討委員会で再度

検討してもらうこととなった。

・会員の入退会について

6月　正会員入会者8名，退会者3名
　　準会員入会者2名
　　賛助会員入会1法人
7月　正会員入会者8名，退会者1名
　　準会員入会者2名

が承認された。

日本学術会議関連の報告

1998年10月31日
第4部会員，統計学研究連絡委員会担当
吉村　功

[統計研連]

第17期第4回の研連を9月14日に開きました．今回は「統計科学におけるパラダイムの転換」に焦点を絞って，自由討論を行いました．統計科学といった場合，それを規定する方法論は何か，そもそも方法論として独自性，固有性が確立し得るものか、従来からのモデル論の枠組みで現実に求められているデータ解析の課題が解決できるものか，などなどです．

学問というものは生きている限り変化します．それを少数の人間が規定しようとすることなど不可能です．研連で議論をしたいのはそういうことではなく，現実に動いており変化している枠組みが，非統計家（及び統計教育に従事している人）に正しく意識されていないのではないか，それが統計学の有効利用や今後の統計学を支える統計家の養成を阻んでいるのではないか，これについて統計学関連の研究者・教育者の間で議論をする機会を設けた方が良いのではないか，ということです．

委員会では，来年春にシンポジュームを開こうということになりましたが，具体的な日時や，どなたに問題提起をお願いするかについては，各学会の都合や予算の関係を含めて委員長と幹事で原案を作ることにしています．いずれ皆さんにお知らせしますので，この催しへの積極的な参加をお願いします．

[学術会議]

10月27日～30日に，総会と各委員会，部会が開かれました．10月26日に出された「21世紀の大学像と今後の改革方策について」という答申を巡る議論，国立研究機関の独立法人化を巡って「国立研究機関のあり方について」という見解を発表しようという議論，「情報研究の中核的研究機関準備調査委員会（中間報告）」を巡る議論，研連の再編を巡る議論等が行われました．答申や報告についていうと，報告作成に参加している人がいる一方で，その影響を一方的に受けそうな人もいますので，全体としてはっきりした見解を出すのはけっこう難しいことです．最終的には，「，，，を行うときには，，，，を十分考慮して，，，，」という総論的なことを「言葉を選んで」結論とする，あるいはしようとする，ことになりそうです．

なお，国立情報学研究所の準備委員会には，統計数理研究所の北川源四郎教授が専門委員として参加されています．いろんな議論のなかで，私にとって印象的だったのは，第2常置委員会（学問の・思想の自由並びに科学者の倫理と社会的責任及び地位の向上に関すること）で，「政府と産業界に，大学の現状に対するいらだちが満ちている．これは日本だけのことでなく，ヨーロッパでも（日本より強く）現れている．大学の内部からその危機感に対応する動きがないことが，たとえば学長権限を強めよという答申に現れているのだ」という解説が，答申作成に関与した委員から述べられたことでした．大学，とりわけ国立大学の人は，そういうことを意識して答申を読むべきでしょう．もし国立大学の教官が答申に無関心ということになったら，それこそまさに，「いらだちを増殖する」ことになりそうです．

行動計量学のためのインターネット(6)

統計情報の収集と発信

立教大学社会学部 安田 雪

1. 官庁から

我が国の統計データの公開を大変、積極的に推し進めているのが、総務庁統計局統計センター・サイト(http://www.stat.go.jp/)である。統計センターのサイトからは、膨大な調査データの概要およびデータの閲覧が可能である。国勢調査をはじめ、人口推計(月報・年報)・住民台帳人口移動報告・労働力調査・就業構造基本調査・社会生活基本調査・事業所企業統計調査・科学技術研究調査・家計調査・消費者物価指数・産業連関表など主要な統計データが公開されている。

統計センターのサイトでは、主要統計表のデータをテキスト形式ではなく、エクセル形式でダウンロードすることができる。これは便利だ。クリックするだけで、必要なファイルを自分のマシンにダウンロードし、自由に活用することができる。ただ残念なことに、データファイルの位置が統一されておらず、その位置がわかりにくい。

また、統計センターのエクセルファイルは、ファイルサイズを明示していないので、注意が必要である。ダウンロードに必要な時間は、ネットワーク回線の太さと混み合う時間帯に依存するため、できるだけ高速の回線を使っている時に、ダウンロードしたほうが良い。通常の電話回線のような細い回線で込み合う時間帯に接続している時に、大きなファイルをダウンロードすると、時間と費用がかさむ。

米国の国勢調査情報は、米国のCensus Bureauのウェブページから入手することができる(http:// www.census.gov/)。こちらは、更新情報の連絡サービスやデータ閲覧サービスなどもがあるが、多くが有料のサービスである。

2. 大学から

ユニークな統計情報データベースサーバがUCLAで運営されている。統計学関係の電子ジャーナル、学会情報、教育用リソースの情報の検索窓口となる、UCLA の Statistics Bookmark Database =統計ブックマークデータベース(http://www.stat.ucla.edu/ bookmarks)である。世界の統計関連サイト情報(残念ながら、日本関係は弱い。今後の発展を期待しよう)、統計ソフトウェア、プログラミング、世界の統計データベースへのリンク集、教育用統計ソフトや www 上の教育用資料などのリソース情報を検索することが可能である。

3. 学会・プロジェクトから

調査の結果だけではなく、分析前の元の数値データが公開されれば、新しい分析が可能になるため、その意義は大きい。例えば、米国統計学会の Journal of the American Statistical Association. に掲載された論文で用いられた元データの一部を公開しているサーバもある。(http://lib.stat.cmu.edu/ jasadata/)。

データが放置されたままになることなく、再分析にむけて有効活用されるのは望ましいことである。データが創出しうる価値の可能性はどれほどの人々の目に触れるかに依存する。サーバからのデータ公開は、不特定多数への提供であり、リスクもともなうが、無限の可能性につながる。

社会調査のデータは、回答者のプライバシー保護及び利用目的の確認など、細心の注意が必要であり、考慮すべき点が多い。そのため、現状では、社会調査のデータ公開はなかなか進まない。

このような状況をふまえ、日本においてたちあがったばかりのプロジェクトがある。社会調査データの蓄積と活用をめざしたSORD (Social and Opinion Research Database = 社会・意識調査データベース)プロジェクトだ。(http://postpc.sgu.ac.jp/SOCIO/sordhp/)このサイトでは、データ利用を学術研究目的に限定することを前提に、調査データ・概要・情報・調査表・コードブック・単純集計結果表・単純集計プログラム・データ利用に関する条件が、有志の研究者によって提供されている。提供者と利用者が誓約書を交わし、データの有効活用を図る画期的な試みだ。今後の発展が望まれるサイトであるが、提供可能なデータをもつ有志の協力がそれには不可欠である。

行動計量学のためのインターネット(7)

医学文献検索における革命--PubMed

帝京大学医学部 野中浩一

研究者にとって文献は生命線である。かつてすべて図書館で雑誌の実物の目次からbrowsingしたり、せいぜいコンテンツ誌に頼っていた文献検索が、MedLineのオンラインキーワード検索ができるようになったときは1回目の衝撃を受けた。悩みは、有料であることと、80年代初期以降のものしか電子化されていなかったことだった。そして、数年前に米国立医学図書館(NLM)のNational Center for Biotechnology Information(NCBI)が提供するPubMedのサービスを初めてInternet上で利用したときは、こんなものがただで使えていいのだろうか、と思わず絶句し、その衝撃は1回目を超えた。80年以前の文献にも価値がある分野の仕事をしていると、タイトルまでだけとはいえ、60年代まで情報が遡及的に追加されていることもうれしいし、最新のものもタイトルはすばやく登録される(新聞・雑誌で取り上げられた記事の原論文を探しても結構ひっかかる)。実用上は、有料のCD-ROMベースのものと違って、全年度を一度に検索できる点もありがたい。ともあれ、アメリカの税金で有り難く使わせてもらっている身としては、アメリカの景気が落ち込まないことを祈っている(かりに日本国に同じプロジェクトができたとして、果たしてこれを一種の共有文化財産として無料で公開するだけの勇気があるだろうか)。もちろん、「NOTICE: The PubMed data are for personal use only. Users are responsible for complying with all copyright and licensing restrictions」という注意事項を遵守しなくてはならない。

入り口となるアドレスはいくつかあるが、とりあえず概説が書かれたページ(http://www4.ncbi.nlm.nih.gov/PubMed/overview.html)を読んだら、検索のためのページ(http://www4.ncbi.nlm.nih.gov/PubMed/medline.html)を覗いて見るとよい。基本的にはキーワードで文献を検索し、ANDやORを使ったりしながら必要な文献を絞り込めばよい。＊の記号を使った前方一致や後方一致の検索もできるし、キーワードのbrowse機能もあるようである。とりあえずキーワードを入力して検索するだけなら誰でもできる時代になったのだから、ある分野の専門家であることは、すなわち「余分な文献を拾わず、必要な文献をもれなく拾えるような検索式を知っている」ことと同義になった感さえある。検索式の約束事についてきちんと勉強したい人には、http://www4.ncbi.nlm.nih.gov/PubMed/syntax.htmlのページが参考になるだろう。ふだん、ANDで絞り込むことしかしていない人も、一度目を通しておくと役にたつかもしれない。

PubMedでは、登録されている限り、抄録までの情報はすべて無料で見ることができるし、ファイルに保存することもできる。「personal use」の最も大きなものは、個人用の文献データベースであろう。したがって、一度検索した文献は整理して保存し、とくに英文の論文を書くときにReference作成と連動させれば効率がよい。筆者はMacintosh上のEndNoteというソフトウエアを使っているが、実はこのソフトの最新版には直接PubMedと接続して検索結果を個人データベースにダウンロードする機能さえある。

現在の悩みは、PubMedに匹敵するような日本の学術雑誌のデータベースがないことである。CD-ROM版の医学中央雑誌も試してみたことはあるが、まだよほどでないと日常的に使う気は起きなかった。不景気対策に税金を使うのであれば、速効性はなくともこうした文化的な事業にもっと回せば出るゴミも少なくていいのに、と筆者は思うのだが、どうも世の中はそれどころではなさそうである。

最後に、これだけ文献検索が便利になったし、集めた文献もかなり多くなったのに、前の世代の研究者と比べてちゃんと文献を読みこなしているか、と尋ねられると反省することが多い。今では雑誌によっては契約者は全文をインターネット上で閲覧できるし、PDF形式のファイルとして保存することもできる。今後もますます便利になるだろう。しかし、検索しただけで仕事が終わった気になるようでは、かえって害があるのかもしれないと自戒している。

関連学会等カレンダー

＜研究会・シンポジウム等＞

☆人工知能学会・人工知能基礎論研究会 (SIG-FAI) 第35回研究会

テーマ:小特集「発見科学」及び一般演題

招待講演:「On logics for data mining」

講演者 Petr Hajek

(Institute of Computer Science,

Academy of Sciences, Czech Republic)

日 時:1998年12月17日(木),18日(金)

会 場:九州大学 国際ホール

照会先:元田 浩(主査)

大阪大学 産業科学研究所

TEL:06-879-8540, FAX 06-879-8544

E-mail:motoda@sanken.osaka-u.ac.jp

研究会 Web Page :

http://www.ar.sanken.osaka-u.ac.jp/SIG-FAI/

☆人工知能学会知識ベースシステム研究会 (SIG-KBS)第42回研究会

テーマ:『共通データに基づく知識発見手法の比較と評価(第2回)』および一般

日 時:1999年1月27日(水), 28日(木)

場 所:東京工業大学長津田キャンパス

照会先:津本周作

東京医科歯科大学難治疾患研究所情報医学研究部門

〒113-0034 東京都文京区湯島1-5-45

E-mail: tsumoto@computer.org

研究会 Web Page

http://www.kdel.info.eng.osaka-u.ac.jp/~kitamura/SIGKBS/

☆統計数理研究所 ワークショップ

テーマ:「因果推論とその基盤」

日 時:1999年1月29日(金), 30日(土)

会 場: 統計数理研究所・講堂

※薬効評価 ・ 健康科学における因果推論の基礎とその推論を支える基盤の育成をテーマとするワークショップ

演 者 :佐久間 昭(医薬品機構)

広津 千尋(東京大学)

津谷 喜一郎 (東京医科歯科大学)

宮川 雅巳(東京工業大学)

濱嶋 信之(愛知がんセンター研究所)

光森 達博(日本シェリング)

比江島 欣慎(山梨医科大学)

佐藤 俊哉(統計数理研究所)

討論者: 大津 起夫(北海道大学)

狩野 裕(大阪大学) 他

参加自由(無料)

照会先: 統計数理研究所 柳本研究室水野涼子

E-mail: mizur@ism.ac.jp

http://www.ism.ac.jp/~yanagmt/workshop.html

☆「時系列・時空間事象の統計的解析」

(1998 年度 統計数理研究所共同研究 研究会 (10-共会-7))

※時系列解析にとどまらず, 空間統計や時空間モデリングも含めて, 多方面 にわたる最新の研究 成果を, 集約的に討議する集会。

日 時:1999年2月4日(木), 2月 5日(金)

会 場:統計数理研究所講堂

照会先:東京工業大学 情報理工学研究科 数理・計算科学専攻 間瀬 茂 (研究代表者)

〒152-8552 東京都目黒区大岡山2-12-1

TEL: 03-5734-3877

E-mail mase@is.titech.ac.jp

又は 川崎 能典 (統計数理研究所)

E-mail: kawasaki@ism.ac.jp

http://www.ism.ac.jp/~higuchi/COE/meeting2.txt

＜科研費による研究集会＞

科研費による研究集会の情報の詳細は、下記の統計関連学会の Web ページを参照して下さい。

http://sunyht2.ism.ac.jp/SYMPO/math10.html

Ⅰ.「非正則推測理論と情報量の概念に関する研究」[基盤研究(A)(1)](研究代表者:赤平昌文, 課題番号 10304005)によるシンポジウム

☆「多変量解析と時系列解析のハザマ」

(研究分担者:狩野 裕, 谷口正信)

日 時:12月17日(木)～12月19日(土)

会 場:大阪大学人間科学部東館207講義室 (ユメンノホール)

内容・目的:心理・教育・社会などで扱われる反復測定データは, 測定は数時点であるが独立標本が多くとれる. 一方, 工学・経済などで扱われる時系列データは, 独立標本はたくさん取れないが測定時点が多いという特徴がある. これらの分野の方法論はそれぞれ独立に発達してきた. 本シンポジウムの第一目的は, 双方の分野の最新情報の交換の場とすることである。しかし, より広く多変量解析または時系列解析に関する話題も扱う。

照会先:大阪大学人間科学部 狩野 裕

〒565-0871 吹田市山田丘 1-2

E-mail: kano@hus.osaka-u.ac.jp

Ⅱ.「非線形統計モデルにおける統計理論とその応用の研究」[基盤研究(A)(1)](研究代表者:白旗慎吾,課題番号:09304024)によるシンポジウム

☆「非線形統計モデルとデータ解析」

(研究分担者:白旗慎吾,後藤昌司,坂本 亘)

日 時:1999年1月29日(金), 30日(土)

場 所:三重県鳥羽市ヴィラ志摩
内容・目的:非線形統計モデルの提案、解析およびそれに基づくデータ解析に関する研究、研究紹介、適用例の発表
照会先:大阪大学基礎工学部数理教室
白旗慎吾
〒560-8531 豊中市待兼山町1−3
e-mail:sirahata@sigmath.es.osaka-u.ac.jp
Fax : 06-850-6496

III.「複雑非線形現象の統計理論の開発と応用」[基盤研究(B)(1)] (研究代表者:柳川 堯, 課題番号:09440083)によるシンポジウム

☆「ランダム変動を伴う非線形データ構造の探索および解析」
(研究分担者:藤井良宜, 越智智義道,小西貞則, 大滝 慈)
日 時:1999年1月7日(木)〜9日(土)
会 場:広島大学霞キャンパス内 広仁会館
内容・目的:ランダム変動を伴う非線形データ構造の探索および解析
照会先: 広島大学 大瀧 慈
(E-mail:ohtaki@ipc.hiroshima-u.ac.jp,
Fax:082-256-7106)

公募情報

以下の公募は, 応募期限の早い順に並んでいます. 応募資格等、研究者等の公募情報の詳細については, 文部省学術情報センターの「研究者公募情報提供事業」(NACSIS-CIS)の下記 WEB ページも参照して下さい.
http://nacwww.nacsis.ac.jp/index.htm
ただし, 以下には, 同ページに含まれない情報も掲載される場合があります.

☆香川大学経済学部
1. 講座名 「地域科学」大講座
2. 職名・人員 助教授または講師 1名
3. 担当授業科目 大講座「地域科学」で「コンフリクト解析」「ゲーム理論」「オペレーションズ・リサーチ」「線形代数」等の講義を担当できる者。
4. 採用期日 1999年4月1日
5. 応募期限 1998年12月14日
6. 照会先 香川大学法学部・経済学部総務係
〒760-8523 高松市幸町2番1号
Tel 087-832-1807

☆香川大学経済学部
1. 講座名 「情報とコミュニケーション」大講座
2. 職名・人員 助教授または講師 1名
3. 担当授業科目 大講座「情報とコミュニケーション」で「ネットワーク社会論」「情報化社会論」「社会学」等の講義を担当できる者。
4. 採用期日 1999年4月1日
5. 応募期限 1998年12月25日
6. 照会先 香川大学法学部・経済学部総務係
〒760-8523 高松市幸町2番1号
Tel 087-832-1807

☆名古屋大学大学院人間情報学研究科
1. 所属専攻・講座 社会情報学専攻・認知情報論講座
2. 職名・人員 助手 1名
3. 専門分野 認知科学分野で, 人間の情報処理やそのモデル化に関する実験的研究
4. 着任予定 1999年4月1日
5. 応募期限 1999年12月20日
6. 照会先 社会情報学専攻・認知情報論講座 齊藤洋典
Tel: (052) 789-4857 Fax: (052) 789-5452
E-mail: saito@info.human.nagoya-u.ac.jp

☆京都大学人文科学研究所
1. 所属 日本部
2. 職名・人員 助手 1名
3. 専門研究領域 戦後日本社会を研究しようとするもの
4. 応募期限 平成1999年1月14日
5. 照会先 京都大学人文研究所庶務掛
〒606-8501 京都市左京区吉田牛ノ宮町
Tel: 075-753-7531

☆筑波大学社会工学系
1. 所属 社会工学系
2. 職名・人員 講師 1名
3. 公募分野 経営科学(国際経営論, 電子商取引, 統計学, その他)
4. 採用時期 1999年7月11日予定
5. 応募期限 1999年1月29日
6. 照会先 筑波大学社会工学系 教授 香田正人
〒305-8573 つくば市天王台1-1-1
Tel:0298-53-5222 FAX: 0298-55-3849
E-mail: koda@shako.sk.tsukuba.ac.jp

☆大妻女子大学社会情報学部
1. 学科専攻 社会情報学科社会環境情報学専攻
2. 職名・人員 教授 1名
3. 専門分野 文系・理系を問わず環境問題に強い関心があり、社会科学あるいは自然科学的側面から環境情報の解析・評価ができる方で、非実験系が望ましい。
4. 授業科目 現在開講中の「エネルギー環境論, ゼミナール I, ゼミナール II」などの他に, 新規に開講予定の次の専門科目から2科目程度を担当できる方.
専門科目:環境法, 環境デザイン論, 環境モデル論, 環境監査論, 環境政策論, 環境経済学, 環境社会学, 環境保護論, 環境情報処理論など(順不同).
5. 任用予定 2000年4月1日予定
6. 応募期限 1999年2月28日
7. 照会先 大妻女子大学社会情報学部 井上源喜
〒206-8540 東京都多摩市唐木田2-7-1
TEL:042-339-0088 FAX:042-339-0044

E-mail: genki@otsuma.ac.jp

会員の著書等

✧ 丹後俊郎著 「統計学のセンス ― デザインする視点・データを見る目」 (医学統計学シリーズ1) 朝倉書店 1998年

✧ 豊田秀樹著 「共分散構造分析［入門編］― 構造方程式モデリング」 朝倉書店 1998年

✧

学会誌論文投稿先

和文誌「行動計量学」

〒305 茨城県つくば市天王台 1-1-1
筑波大学臨床医学系産婦人科
久保武士
TEL&FAX: 0298-53-3071
e-mail: sigemitu@md.tsukuba.ac.jp

欧文誌「Behaviormetrika」

〒153 東京都目黒区駒場 3-8-1
東京大学教養学部心理学教室
繁桝算男
TEL:03-5454-6267, FAX:03-3485-0481
e-mail: kshige@bayes.c.u-tokyo.ac.jp

入会手続き

学会では新入会員を広く募っています.
詳しくは,
〒113 東京都文京区本駒込 5-16-9
学会センター C-21
(財) 日本学会事務センター内
日本行動計量学会係
TEL: 03-5814-5810
FAX: 03-5814-5825
まで, お問い合わせ下さい.

行動計量学会会員数

(1998年8月現在)

正会員	932人
準会員	42人
名誉会員	6人
賛助会員	21社

編集後記

行動計量学会は社会、心理、医学、工学、経済学、統計学、などなど、様々な分野の会員で構成されています。一つの分野での深く掘り下げた研究とともに、学際的で幅広い知識・考え方をふまえた上で研究することの必要な場面も少なくないと考えます。今回のインターネットの記事は統計情報の収集と発信を立教大学の安田雪先生に、医学面での文献検索を帝京大学の野中先生にまとめていただきました。また、このたび学会のホームページも開きましたので、ご活用いただければと思います。詳細は本文中にあります。

会報を会員相互のコミュニケーションの場としても, 活用して下さい. 会員の皆様からの御意見など, お待ちしております. また、会員の方の著書や指導された博士・修士論文も紹介しております。

原稿の送り先は次の通りです.

会報原稿送付先

〒173-8605 東京都板橋区加賀 2-11-1
帝京大学医学部衛生学公衆衛生学教室
山岡 和枝
TEL: 03-3964-1211(内 2178)
FAX: 03-3964-1058
e-mail: kazue@med.teikyo-u.ac.jp

(会報作成担当：山岡和枝・前田忠彦・山下智志)